

---

# 笑い声

森山KOUSEI

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

笑い声

### 【コード】

N7927M

### 【作者名】

森山KOUSEI

### 【あらすじ】

女子高生の涼子は普通の高校生活を送っていた。しかし、彼女には恐ろしい魔の手が延びていた……



「私、最近お母さんが死ぬ夢を何度も見るの、車と車が衝突しそうになって避けた時にお母さんが巻き込まれて……  
ねえ先生、悪い夢だよ。そうだよ。」

担任は宥めたが、女生徒の夢は言った通りに現実に起こってしまった……

担任は顛末を同僚に話しまい、それがどこからか漏れて生徒達に耳に入り、悪い噂に変貌し、女生徒が母親を殺したという噂になってしまった。彼女には中傷の言葉が浴びせられ、いじめに発展。

注意や叱咤を生徒にする反面、担任は女生徒に不気味さを感じていた。

解決策として生徒会長をしていてクラスで権力を持つてる女生徒に助け船を出した。彼女の母親とは遠縁であり、親子と親交があった内容としてはいじめの対象の女生徒と仲良くしてほしいというもの話し、了承してもらい、その生徒と共に何とか問題は解決へと向かって、担任はそつと胸をなで下ろした。

少女二人は話していた。

「経済力はないけど、心根は悪い人ではないよ。お母さんにとっては後々に厄介者になるけど、涼子ちゃんとは悪い感じにはならない

し、関係は良好であると思う。不安や心配はあるかもしれないけど、きっと大丈夫だよ。」

話す少女にもう一人の少女は黙って聞いていた。

目覚めると蒸し暑く軽く汗をかいていた。携帯を見ると予定時刻より五分早く起床していた。アラームを解除して、ベッドから降り、リビングへ向う。母がテーブルに突っ伏して寝ていて、毛布をかけて、冷蔵庫を開け、炭酸飲料を飲み、浴室に向かう。シャワーの水を浴びていると、就寝中に見ていた夢の事を反芻した。

あれは小学生の時……………

佐田庵、通称貞子、暗く前髪が垂れ下がり、風貌がそっくりでクラスではいつの間にか流布されていたニックネーム。

私は彼女と親交を築き、友人になるのだけれど、ここには背景がある。

貞子には悪い噂が流布され、いじめにあっていた。その事について遠縁である担任が私に「お年玉多くあげるから、何か買ってあげるから」そう言って仲良くする事を示唆した。条件は悪くないのです

承し、いじめの件は共同作業で何とか解決。そしてある男性の事を私は貞子に相談していた……

浴室を出ると母は起きていて、何か作ろうか口を開いたけれど、私がコンビニで何か買うからいいと断った。そうと頷き、吐息をつく。母の声はかすれていて、少し疲れているようだった。制服に着替え、身支度をして、ドアを開けると、いつてらっしやいと絞り出した母の声に私はうんと頷きドアを開く。

母は私を一人で育てている。事の顛末は母の男運の悪さである……

父は私が生まれた後すぐに亡くなった。

育児が忙しい時期に亡くなった父に対して母は悲しむというより、呆れていた。

何故なら死亡原因が浮気相手との性行為中に浮気相手とともに亡くなったからだ。私が聞いた話では薬を飲みすぎて心臓に負担がかかり、亡くなったと酔っ払った母から聞いていた。

その事に関して父の親族は申し訳なさでいっばいだっただろう。私達にいろいろな援助をしてくれた。ただ母にしては疎ましい部分をあつたのだろうか……

彼等は私をとても可愛がってくれた。だから父方の親類とは私は仲が良い。

援助はあるものの、生計に困った母は知り合いから水商売を勧められ、働く事になった。元々母は容姿はなかなかの者であり、お酒も強い方であった。しかしこの職業でまた男運の悪さを露呈してしまう。

母も女であるから恋はする。店の客と仲良くなり、次第に情事へと

……

対面した私からは普通のおじさんにしか見えなかったが、母からは好意をよせるポイントみたいなものがあつたのだろう。時折見せる顔は母親のものとは違っていた。

私は男性に対して接し方が分からず、困惑させていた。男の人が私達の生活に関わるかもしれないという事態に当時の私としては困惑していたのだろう。私はこの事を貞子に話していた。

詳細を話すと貞子は私の肩に手を置いて、瞑想を始めた。

静寂した空気と貞子の姿は神秘的な印象が漂い、貞子はゆっくりと目を開ける。澄んで真っ直ぐに見つめる瞳はビー玉みたいに綺麗だった。

「経済力はないけど、心根は悪い人ではないよ。お母さんにとっては後々に厄介者になるけど、涼子ちゃんとは悪い感じにはならないし、関係は良好であると思う。不安や心配はあるかもしれないけど、きつと大丈夫。」

何の根拠もない事を悠然と話す貞子に対して、前々から抱く不思議な違和感が強くなった。彼女だけいつも漂う空気が特殊だった……

システムエンジニアとして働いていた高崎邦夫は会社を辞職し、その事を告げ、さらに彼は話す。

「俺には大きな夢がある。ジョンレノンみたいに世界を大きく変える歌を作りたい。だから今からでも遅くないからこの志を胸に頑張

りたい。」

傍観していた私は母の方を向くと口を大きく開けて固まっていた。その姿は今まで私が見た事ない姿だった……

ストリートミュージシャンとなり、駅前で歌を唄い、週二のピラ配りのバイトを始めた。

母は呆れ、愛はなくなり情だけが残った。

彼は私に対してはいつも優しく接してくれていた。部活で遅くなる私を毎日迎えにきたり、PCの使用方法や勉強、私の買い物などにもつきあってくれたり、彼は父親らしく振る舞おうとはしなかった。それが意図的なのかは分からないが、しかしその点が関係が続いた理由だろう。私が高校入学からひと月して別々の道を歩んでいった。

振り返ると貞子の言葉は当たっている。

貞子の祖母は神通力という特殊な能力を持っていたと聞いた事がある。そして貞子にはその能力備わっていると……

渾名の理由の一つに起因している情報は今では記憶が曖昧になって、どこで聞いたか思い出せない。

「おっはよう。」

真希が私の後ろに勢いよく抱きついた。私はそれを無表情で返事を返す。

「おはよう。今日も朝からテンション高いね。」



「涼子も相変わらずクールだね。」

真希はやたらと私に対して体を寄せてくる。そんな真希の事をレズ？と少し疑ってはいるのだけれど……

真希は入学式早々顔を会わせた瞬間に質問責めにあい、携帯番号を聞かれた。真希は可愛かったり、綺麗な子の場合すぐ番号を聞いて友達にしたがる。真希が言うには私が相当な美人だったから声をかけたのだと、周囲から容姿を誉められる事が多かった。クールビューティーといわれ、よく告白されたり、街を歩くと逆ナンされ、一度芸能事務所からスカウトされたりもした。その時は少し迷ったのだが、後で調べたら事務所は小さく、経営方針があわなかったの  
で私はパスした。

教室に入るといつものメンバーが教室の隅にいた。

「おはよう。今日もカップルはお熱いね。」

彼女の名は佐伯絵理子、私と中学からの同級生。性格がかなりのオツサンで空気を止める特殊能力をもっている。絵理子が面白いという話は全て空気を止めてしまう。所謂スベる話なのだ。それに笑える話という紹介からハードルを上げている。絵理子がメンバーの中で付き合いが長い。

「アレ、えりえりイメチェン」

「ううん、ただ髪切っただけだよ。それよりさ、面白い話があるんだけど、」

「パスパス、えりえりの話つまんないし〜」

「今日はすごい面白いんだから」

またハードルを上げ、見事に空気が止まった。

私達はプロの芸人ではない。だからこの対処は至難である。彼女は私達に何回か空調の音が聞かせる程である。

「アンニョンハセヨ」

救いの声が聞こえ、振り返ると赤石七海は得意の韓国語で来日してきた。

七海は韓流オタクで、私が一番先に韓流ブームを予測してんだと言いつ張る。ちなみに彼女のお気に入りはウォン・ビン。七海の韓国語の挨拶されたら私達も何故だか韓国語で返してしまう変な習性を今日もした。

「ねえ、大ニユースがあるんだけど」

七海は嬉しそうに笑顔で話し、ポケットから一枚の写真を出した。じゃーんという音声つきで

「これ、東海南高？」真希が食いついた。

「そう。しかも結構イケメン揃いでしょ、この人達と合コンする事が決定しました。」嬉々として話す七海にウツソーと感嘆する真希、マジ？マジ？と聞き返す絵理子、表情を変えず頷く私、東海南高校は偏差値が高く某有名大への進学率が高い高校、女子校という出会えない私達にとっては私を除く周りにはとてもいい話なのである。七海は話を続ける。

「それで一応、五人対五人で六日後、会費は全部あっちもち、これかなりいい条件じゃない？」

自慢気に話す七海に真希は「どうやってセッティングしたの？」と聞いたら、質問を待ってたかのように解答し始めた。

「まず合コンの話事態は上がってたんだよね。私写真にも載ってる高野のと中学の同級生だから、でもあっちが乗り気じゃないみたいだったから、真希の写真を見せたの、そしたら食いついて涼子の写真見せたら絶対合コンやるうぜってテンションちよーう高くなつて、全く目の前に美人がいるのに……」

起伏に激しく話す七海をよそに私は素朴な疑問をぶつけた。

「私も参加するの？」

一斉に驚きと困惑を合体させた表情を向けた。

「涼子が来ないと始まんないでしょ？」

「合コン行こうよ、涼子がいないとつまんないしー」

「て言うか、行かないつもりだったの？」

一斉射撃に少したじろいだが、私は開口した。

「私あんまり乗り気じゃないだよね……」

発言すると少し訝る様子で七海が彼氏がいるのと聞いてきて、私はいないと答えるとならいいじゃん」と強引に押し進められ、話は四人しかいないメンバーの後一人、誰を誘うかになった。絵理子がやけ、冗談半分で一人の席を指した。

「貞子を誘う？」

真希が絶対嫌だ暗いし、雰囲気悪くなると非難の声、それを見越してたかのように絵理子は笑う。

貞子とは小中高一緒で、風采は相変わらず渾名そのもの。

関係はそのままだが私は蔑んだ気持ちをもっている。(あいつがきてもつままないよね) 心の中で呟き、いつか縁を切ろうと考えていた。

少しの談笑の後にチャイムがなり、ホームルームが始まった……………

物置部屋の僅かな隙間から母を見ていた。優しく温かい表情を向け、やがて悦に入る。母は幸せな様態をしていた。僕には苛つき、暴言を吐く。一度だって僕に愛情を注いでくれた事がない。だけど今日の前にいる男には愛情というものを注いでいる。それは肉体的にかもしれないが……………

母は満面の笑みを浮かべる。卑しく、品性の欠片もない男と談笑を

交わす、とても楽しそうに……

母に僕という存在に対しての愛情が欲しかった。だから物置部屋に隠れてみた。心配して探してくれる事を期待していた。だが、すぐに期待は打ち破られた……

母と男の性行為や談笑の様相を見ていると憎しみみたいなものが生まれた。

粘着質で黒く濁りきったものが僕の心に淀む。

その液体は僕の一部に残った……

「惨殺事件にあった人の魂は成仏できるのかな？」

昼食終わりの何気ない昼休みに真希から出た言葉は予想外だった。

昨夜ニュースで起きた。女性死体遺棄事件、遺体はバラバラに切り刻まれ、頭部がない状態で放置され、身元確認も出来ていない状態であると美人のニュースキャスター伝えていた。事件場所が私達が住む近辺で起きた事件であり、クラスのあちこちで話が耳に届いていた。歯磨きが終わった私と絵理子と真希の耳に事件の話が耳に届

き、真希が開口したのだ。  
少し驚いた私、隣の絵理子が真希の言葉を聞いて反応した。

「死者の怨恨が強く残った場合、死んだ肉体は変化し、人間の姿じやなくなる。変化した肉体は現世に姿を表す。」

悠然と論文を読むように話す絵理子に真希と私は目を丸くした。状態に気づいた絵理子は交互に私と真希を見ながら、口を開く

「前に幽霊についての本を読んだ事があるの。そしたらね。書かれてて……

抜粋して言うてみたの」

絵理子は性格的に私と似ている部分がある。常に冷静で今時の女子高生のような話し方をしない事。余計な事を言うのは全く似てないのだが……

それ意外の話す内容は確信に近いものである。

七海が戻ってきて私達の様相について聞いてきて、真希が説明していた。

ふと気がかりだった視線に目を移した。彼女は目が合うとすぐに逸らして、廊下に向かった。

私は後を追い、彼女に今日一日中、私に視線を向けていた事を質問した。彼女は億劫そうにして答えた。

「……………涼子ちゃん……………気をつけてね……………」

彼女はそう言って、廊下を足早に去っていく。怪訝な顔をした私はただ立っていた……

虐待をしていた男とそれを傍観していた母親は呆気なく交通事故で死んだ。対向車を避けようとして崖から転落して死んだ。スピードを出してカーブを中央線を越えて曲がったのが原因。運転手の男は酒を飲んでいた。

母親が死んだ時、僕は無表情でいた。周りがショックで放心状態に陥っていると勝手な解釈をして、僕を気遣った。

母親が死んだ事は悲しいが、僕が想像してたよりも悲しくはなかった。二人が生きていた場合、僕は死んでいたから……………

男の暴力は酷く、母親も食事を満足に与えなくなっていた。子供ながら僕はこのまま続けば死ぬという事を悟っていた。だから彼等が死んでも大きなショックを受けなかった。

彼等の通夜の日に一人の男性が表れた。それは母親の叔父。叔父は僕と話をして、「叔父さんと一緒に暮らそう」と柔和な笑顔を僕に向けた。隣には奥さんがいて、彼女も笑顔を向けた。親戚は叔父さんしかいなく、養護施設に引き取られると薄々悟っていた僕は叔父さんの笑顔と優しさに嬉しさを抱いた。

一緒に生活が始まってからも叔父さんは優しくかった。虐待の傷を見る度に「…………ごめん…………ごめん…………」言いながら泣いていた。叔父さんと母は音信不通になっていたため、僕の存在さえも知らなかった。もし、知っていたら僕の世界は変わっていただろう。

叔父さんは子供が作れない体だと、変態女から聞かされた。僕の体を弄ぶ。汚い女から……

一緒に暮らすようになってから女は脅すように体を強要した。小学六年生の性の知識は浅はかで、最初は言っている意味が分からなかった。最初の体験を汚らわしく、下品なものにされた。「叔父さんに言ったら、施設に入れてやる。ただ育ててもらっているだけありがたいと思え、」女の汚い言動は脳裏に焼き付いた。

叔父さんの前では感情を表さない仏頂面の女。叔父さんは女との関係をどこか諦めてる節があった。

満たされない性生活を強要する女に僕は粘着質の黒く濁りきった液体が溜まっていく。液体がグチャグチャいろんなものを混ぜて溶かしていく。怒りや悲しみ、そして僕の感情を支配する。濁りきった黒い液体が僕を包んでいく……

互いの部屋のドアの前で笑みを浮かべながら会話をしていた。私は一昨日の事が気懸かりで、彼に聞いてみた。

彼は私を怪訝そうに不審な目で数秒間見つめて、開口し、その日は自宅には居なかったと答えた。私はでも確かに笑い声が聞こえたと答えた。



私のアパートには右に隣接して彼の部屋があり、左隣には階段があるだけだ。

互いに不審に思いながら私はドアを開け、部屋に入った時に背中に悪寒が走り、後ろを向いた。酷薄な視線を誰かが向けているような気がした。

しかし、向いた先にはドアしかなく、人などはいない。でも見られている感覚はあった。不気味で殺意が滲んでいて、冷たいもの。確かに私は感じていた……………

ザーザーという音が聞こえた。民放の放送が終了している合図である。いつの間にかベッドで眠ってしまった私は、つけっぱなししてあるテレビを消そうとする。

……………全身が動かない。

体を縄で堅く強く縛り付けているような感覚、苦しく、怖さが押し寄せる。瞼の開閉だけは出来ていて、天井のシミを見ていた。

足音が聞こえた。

しかしそれは明らかに不可解。

二足歩行の足音ではない……………

人間の足音ではなく、音が二つ多い。

私は瞼を閉じた。

音と気配で近づいてきていると分かる。心拍数は高くなり、恐怖心が増幅する。私は願う。どうか私のもとに来ないで……………

音が止まった。

心拍数が一定になろうとした時、

ギィィィ

ドアが軋みながら開く音が聞こえた。ノブを回す音が聞こえなかったという事は半開き状態、そこに得体のしれない何かが入ってきた。

奇妙な足音らしいものが聞こえる。ベッドに近づいてきている。

恐怖心はあったが、位置と姿を確認しなかった。瞼をあけると目の端に何か映っている……

それは人間の形ではなく、蜘蛛の形に似ていた……

さらに恐怖心は増幅され、瞼を閉じた。

ベッドの周りをさまよい。また奇妙な音が聞こえた。私は気配で壁を登っているような気がして、足音が止まった時には天井にいる気配がし、瞼を絶対に開けないと頑なに自分に聞かせ、沈黙が流れた……

ポタッ

水滴らしいものが落ちて反射的に瞼を開けてしまった……

姿を見た瞬間に瞼を最大限に大きく見開き、体躯全体に戦慄が走った。

関節全てが逆方向に曲がっている。人間が蜘蛛のような姿で、不自然な体はまるで関節付近を全て切られ、くっつけたような形。

頭部の一部分の女性の顔が、血走った目で私を睨んでいた。口から滴り落ちている血液が私の顔に落ちてくる。

口を開く描写がゆっくりと映る。歯の表面から上下の唾の線まで映し出す。女は複数の人間が重なり合った声を私に向かい、響かせた。

「次はお前だ!？」

体をくの字に曲げて飛び起きた。大量の汗は夏の暑さからではない。心霊体験は生まれてから一度もなかったのに……

「おっはよう」

勢いよく後ろから飛びつく真希に対して、私は怯えてしまった。私は普段と変わらぬように挨拶をしたが、さっきの対応と血色の悪い顔で異変に気づき、心配しだした。

教室に入ると絵理子が異変に気づき、真希は体を揺すらせるほど何があったが聞いてきたが、絵理子は整理できたら話してと悠然と言った。七海は遅刻してきて異変に気づいたが、いつもと同じように

接した。視線を感じて振り向くとまた貞子がすぐに視線を逸らせた。

18歳になると僕は就職して一人暮らしを始めた。悠々自適に暮らし、仕事も順調であった。しかし、周りには性交渉を求めてくる若い女達がうろついていた。

一人の女が求めてきて、それに従った。女は薬を興奮剤に使い、僕にいやらしく体を寄せ、舌を動かす。行為中に女は首を絞めてと言いつつ、僕は実行に移した。

絞めている時に忌々しい女達の顔を浮かべている自分がいる。力をこめると、感じた事のない高揚感を抱かせた。次第に強くなる。興奮が増幅され、今まで仏頂面の感情を表さない女が顔を歪め、苦しみ、助けを請う様態が快樂だった。

女は寸前で逃げ、罵声を浴びせ、部屋から出て行った。残った僕は楽しい玩具の発見に笑い転げた。

知人や情報を伝に僕は闇のマーケットに潜り込んだ。そこには規制の枠を飛び越えた所謂変態の器具、DVD、VHS、などが並び、怪奇的な人々が売買をしていた。僕は一つの媒体に興味を抱き、購入した。

媒体がテレビ画面から映す映像は女性に傷を負わせながら性行為しているもので、傷は深いものではなく、主に性行為を重点的に描いた映像、性行為に興奮せず、女が苦痛や拒絶反応を示す表情に高揚

感が沸き立つ。ナイフで傷つけられ、血液を垂れ流しながら、嗚咽や涙、恐怖に苛まれる表情に……

人間は法律や規制に縛られなければ人間として生存する事は出来ない。それが無ければ、欲望や欲求を抑えられない。歪んだ行為を与えられた者は歪んだ欲望や欲求に取り付かれ、規制されない異常な媒体を見て、興奮し、やがて欲望や欲求は増幅され、禁忌を犯していく……………

結局、あの事を誰にも言い出せぬまま、アパートに帰りついてしまった。

事情を話して、真希、絵理子、七海、三人の内誰でもいいから泊まりにいけばいいのだけれど、何故かあの事を話せない。プライドとかそういうものではない。得体のしれない何かを話す事が怖いのだ。昼から降り出した雨は一層強くなり、雨音が強く聞こえ、雷の音も響いている。

私は前に似た情景を想起していた。確か彼の部屋から笑い声が聞こえた日、彼の声が一切聞こえなかった。考えてみると隣から人の声が聞こえた事など一度もない。

このアパートは築十五年という古いアパートだけど、防音設備はしっかりしていると母から聞いていた。しかも隣室の彼は居なかったと

言っている。

じゃあ……………あの笑い声は……………？

機械音に私は一瞬ビクついた。インターフォンがなり、ドアチェー  
ンの隙間から覗くと、隣室の彼がいた。

「昨日の事が気がかりで、ちょっと話がしたくて」

雨音の隙間を縫うような小さくて通った声。深く帽子を被り、眼帯  
をしていたので声を聞かなければ彼とは気付かなかった。さっき想  
起していた声の事を言われ、私は躊躇い、間が空くと彼がドライブ  
に誘った。私は嬉しく、はいと頷き、着替えてない制服姿で行こう  
とした時、携帯のバイブの音が聞こえた。  
手にとり、着信表示を確認すると、貞子から……  
仕方なく通話ボタンを押した。

「もしもし涼子ちゃん、私今涼子ちゃんのアパートの前にいるんだ  
けど……………」

唐突だけど……………私のお願いを聞いてほしいの。  
黙って私の家までついて来てほしいんだ。そしたら……………何でも  
言うこと聞く……………」

必死さと情念を合わせながら貞子は伝えている。貞子に言うこと聞  
いてもらいたいと言うものないし、聞いてほしいとも思わない。  
それに友達でいるかさえ迷っているのに……………」

様々な事を思案していると貞子が「お願い……………」と懇願する声を聞

いて、私は彼に断りをいれ、貞子の所に行った。貞子の前に現れると、傘を投げ、駆け出し、抱き締めた。

雨に濡れる事も気にせず、強く……

瞳を濡らしながら、

私はただ固まっていた……

思えば小学生以来だ。貞子の家に行くのは……

玄関先では容姿と様態が優しそうなおじさんが迎えてくれて、貞子は強引に手を引っ張って終始無言で自室に私を連れていく。不機嫌な表情ではなく、用心深い顔で何かを恐れているよう表情で……

それにしてもどうして私の住む場所が分かったのだろうか？私には教えた記憶がない。

自室で互いに様子を窺う無言状態の間から貞子が開口し始めた。

「今日……うちに……泊まってほしいんだ」

急な申し出に驚き、疑問で反駁した。でも貞子は理由は言わず、懇願し続け、私は否定しながらも、アパートに一人で居る事も嫌なので了承した。

母の仕事場に連絡し、適当な理由を言って、制服は洗って乾燥機に入れ、何故だか取ってある貞子の新品下着を履いた。サイズはほぼピッタリ。

私をベッドに、貞子がソファで寝ることにして、電気を消した。

またあの夢が襲ってくるような気がして、貞子の方に顔を向けてい

るうちにいつの間にか瞼が重くなった……

アラームが鳴って起きると、目覚めは良く、意外と安眠できたよう  
だ。

貞子はまだ寝ていた。リモコンを取ってテレビをつけた……  
……報道は惨殺事件の顔写真と名前、身元不明だった死  
体の名前と顔写真を伝えていた……

二十一歳の時にCLUBで出会った女は薬でラリったどうしようも  
ない女だった。部屋に連れ込み、クロロフィルムを嗅がせ、気絶さ  
せた後に大量の睡眠薬溶かした液を注入して注射器で彼女に刺す。  
黒く濁りきった粘着質の液体が僕を包み込み、欲望と欲求が支配、  
人間の境界を破り、異常性が増していく自分自身に、どこかで客観  
視している自分がいた。

心霊スポットにもなってる現在廃墟の病院を監禁室として使った。  
悲鳴が聞こえても都合がいい、十分に縄でベッドに縛り付けた女。  
チェーンソーで足首に傷を与えて、激痛により、目を開けた女性は  
光景が理解出来ず、混乱し、大きく声を荒げた。  
交互にチェーンソーを持った僕と傷を負った足首を見て悲鳴をあげ  
る。眼球は絶望と恐怖が入り混じり、戦慄が襲う。  
必死に助けを懇願し、涙を流す女を無視して、チェーンソーの音を



響かせた……………

苦痛と恐怖に晒された女は人間とは異なる生物の声と様態。僕は多量の血液を浴び、腹の底から笑い、快樂に浸る。高揚感は最大限に上昇し、狂気を楽しんでいた。

女は足首を切断した時点で苦痛とショックで死んだ。女に対して興奮めし、自分が狙い定める相手を間違った事に落胆した。僕は体を関節ごとに切断し、バラバラにした。袋に詰め込んでいる途中、頭部がない事に気づいた。その一部が紛失する事事態が不可解極まりない事、多量の液体が滴り落ちている中、探した……………

ターゲットとして最初から彼女を狙うべきであった。隣室に住む仏頂面の高校生、僕に好意を抱き、僕と話す時には愛想が良くなる。憎んだ女達に似ている……………

こついう女を苦痛と恐怖に歪む顔を見たかった……………

彼女は不可解な事を言った。監禁室で楽しんでいた日に、隣室から笑い声が聞こえたと話した。不可解極まりない話だ。

まだ頭部は発見していない……………

殺人容疑で逮捕された会社員男性、桜庭治樹（21）、遺体となり発見された女子大生、佐原瑞穂（21）。

報道された桜庭治樹は隣室に住んでいた男性で、佐原瑞穂は夢で這いずり出てきた女性。

佐原瑞穂の頭部は発見されぬまま、身元確認で家族が認め、写真が映された。

報道を視聴した後、一週間貞子の家に引きこもって過ごした。

母には説明できる事情だけ話し、理解を得た。

母も友人宅に泊まっている。引越しの手続きを母は行っているのだが、不動産屋も急な対応は難しい。母はいつも訪問し、着替えやいろいろな物資を持ってきては、顔色や様子を窺い、私を心配している。

学校には母から事情説明してもらい、了承を得て、貞子も私に付き添う形で休む事を何とか了承してもらった。

学校側はケースワーカーを呼び、担任とともに訪問し、対応している。

真希や絵理子も学校終わりに貞子の家に足を運んで来ている。七海が来ない事に真希は憤然していたが、絵理子が宥め、何となく理由を察していた私は特に何も思わなかった。

真希は潤んだ瞳で私に様々な事を聞き、とても心配している。

絵理子は整理出来たら話してほしい控え目に言い、貞子に感謝しないといけないよと肩を叩いた。真希から何度か励ましの電話やメールをくれたが、たぶん絵理子が説得して数は減ってきた。

七海からはメールで私が察していた内容が送られ、私は返信した……

報道を見て、茫然自失になった時に、貞子が起床して様相に気づい

て後ろから抱き締めた。冷え切った体には貞子の体温が温かった  
……  
常に行動一緒にしてくれた。お風呂も一緒に入り、同じベッドで寝た。私は一人になるのが怖かった。また女が這いつくばって出てきそうなのがして……  
だけど貞子がいつも不安に私を察してそばにいて抱き締めてくれた。その優しい温もりが私には痛かった……

一週間経って落ち着き始めた頃、私は今まで貞子に聞けなかった事を聞いた。

「どうしてあの日私の家の前まで来てたの？」

少し驚いたような表情で畳んでいた服を整理し、私の方を向いた。長い髪の毛の隙間から覗かせる瞳は相変わらず澄んでビー玉みたいに綺麗だった。

「涼子ちゃんが住むアパートに男が表れて、一緒にドライブをして、ハンカチから薬か何かをかがされて、涼子ちゃんが目を覚ますとベッドに縄で強く強く縛られ、チェインソーを持った男に……残虐されるの……」

「……そんな夢を二日間見たの……」

私は目を丸くした。貞子は話の途中から辛そうに話した。焦点をずらして、俯き、重々しく悲しい雰囲気を漂わせ、言葉を続けた。

「母が死ぬ前に同じような出来事があったの。交通事故に巻き込まれて死んでしまう夢……数日後に私が夢で見たとおりに母は死んでしまった……」

その後、悪い噂が流れて、私が母親を殺したって事になっていたんだ。でも……  
実際そうなんだよね。私がああ、あの時に母親が出かけて行くのを止めていけば、死ぬことなんてなかった。それが例え現実に起こらなくても、引き止めておけばよかった……」

話を聞いていて、何も言えず、見つめていた。小学生の頃に貞子の母親は買い物に行く途中に交差点で二台の車が衝突しそうになり、避けた一台が横断歩道を渡ろうとしていた母親にぶつかつた。重体で病院に運ばれて来たのだが、脳内出血により亡くなった。  
貞子には何の罪もない。半信半疑で実際に起こると予想もしていなかった事。だけど何て慰めていいかが分からない。  
貞子は暗く俯けていた顔を上げて開口した。

「でも涼子ちゃんが言ってくれたんだ。落ち込んでた私に声をかけてくれて……噂は噂で勝手なもので気にする事ないよ。どういう事が分からないけど起こった事は起こった事で取り返しはきかないから今度はそういう事が起こらないように前に進むしかないから、上を向いて歩こうって、私はあの言葉で元気になれた。前向いて歩く事が出来た。」

私がそんな事を言った事など覚えていないし、貞子を元気づけた事など思ってもいない事だった。  
言葉を発した後に微笑を浮かべた貞子は言葉を続けた。

「でも、夢を見た時に信じられないし、本当に起こるかも分からないって疑ってた。だから教室で傍観してるだけだった……  
でも……友達だから、起こらなくても助けたいと思ったの。  
もし……起こってしまったら、私は……」

記憶を頼りにアパートの前まで着いたけど、そこから先は行けなかった……

涼子ちゃんを殺そうとしてる男がいると怖くて……

だから携帯で必死に話した。そしたら……階段を降りて、涼子ちゃんが目の前に現れた。体が勝手に動いて抱き締めてた。よかった。本当によかったって、涼子ちゃんが目の前にいるから……」

潤んだ瞳で話す貞子に私は視線を逸らせた。泣きそう自分と自己嫌悪が襲っていた。

いつの間にか貞子に抱きついてた。彼女は目を丸くさせ、固まった。

貞子の思いが痛かった……

心の中では友達だと思っていなかったから……

貞子の耳元で「明日、黙って私の言うこと聞いて、ついて来てよ。」告げると彼女はゆっくりと頷いた……

教室に入るとすぐに真希が飛び込んできて、抱きつき、「涼子、大丈夫？」潤んだ瞳で発する。私は頷くと、真希は隣の美少女に気づき、姿勢を正し、彼女なりの丁寧な口調で「どっ、どちら様ですか？」と美少女に質問した。様子をずっと傍観しながらゆっくり近づいてきた絵理子が「貞子………だっけ？」首を傾げながら半信半疑で言っている。美少女終始ずっと照れくさそうにしていたが、ゆっくりと頷いた。真希は「マジで！？ウッソー」と驚嘆していた。

昨日美容室に行つて、ボーイッシュなショートカットにして、眉を整え、薄化粧を施すと彼女は別人に変身した。

暗さは変わってないが、前髪が垂れ下がってなく、表情がはっきりと分かり、ビー玉みたいな綺麗な瞳が見えると、明るい印象を与え

る。

七海が教室に入って来ると一目散に私に近づき、目を伏せてごめんと謝った。メールと同様に許した。七海は私が悪夢を体験した時、どうしていいか分からず、いつもと変わらずにいる事しか出来なかった……

私が引きこもった時も、対面して何を言えいいか分からずにいた。絵理子と私は何となく察していた。メールで送られた文面もそのよくな内容。

七海は一見派手な感じで強気な一面を見せるが、実は弱い自分を隠そうとしてる根は小心者。七海は今回の件を払拭しようと合コンの件を待ってもらっていた。絵理子が合コンの件を聞いて「メンバーは揃ったね」そう言うのと、美少女だけ虚空を見つめて怪訝な表情を浮かべていて、他三人は頷いた。

学校に行く前に美少女は私と友達でいてくれてありがとう、照れくさそうに小さな声で言った。

私には恐怖が襲ってくる。未だに頭部は見つかっていない……

でも私の恐怖より……大切な人を失う正夢を見る貞子の方が怖かっただろう……

違う……もう貞子じゃないんだ。

あの映画に出てくる風采は一つもない、佐田庵という美少女で私の友達。

恐怖は襲うけど、彼女と仲間がいれば、曖昧な予測は嫌いだけど、きつと大丈夫。

もうすぐ夏休み、見えない恐怖に恐れるより、今を楽しみたい。夏の暑い日差しが窓から伝わる。熱気に襲われ、露出が増えて、軽い行動を慎しみながら母親より男運の悪い私も彼氏を見つけよう。庵に鑑定してもらいなから……

そしていつか言おう。私には不似合いな言葉。

私と友達でいてくれてありがとう……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7927m/>

---

笑い声

2011年10月3日02時16分発行